

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

大阪府と奈良県は、北の生駒山地、南の葛城山地を県境として隣り合っている。そのうち生駒山から信貴山へと連なる生駒山地は、古事記や日本書紀ではカムヤマトイハレビコ(神武天皇)の東征を阻んだナガスネビコ(トミビコ)の勢力圏とされ、古くから靈力溢れる神々の山であった。中世以降もその伝統は途絶えることなく続いており、近代においては、大小を問わず伝統的なものから新興宗教まで、あらゆる宗教を呼び寄せる場所として知られている。

その地を、「四半世紀」を隔てて再訪した研究グループが網羅的な再調査を行い、前回から

時代とともに変わる神



◇しゅうきょうしゃかいがくのかい=1980年、関西在住の宗教研究者を中心に発足。

創元社 1900円
宗教社会学の会編

生駒の神々 聖地再訪

の変遷を確認し、現代における宗教や信仰について分析を加えている(旧著『生駒の神々』を読まなくても本書の理解にはまったく支障がない)。当然、宗教にも有為転変があつて消え失せた寺社や無住の堂宇がある一方で、主催者が変わり信者は高齢化しながら賑わいを保っている組織もあり、新たに生じたものもある。宗教は時代を映す鏡だということがよくわかる。

生駒山地のなかでも西側、つまり大阪のほうに神はひしめいている。それは巨大都市・大阪に支えられて生駒の神々が生き延びたことを示している。在日コリアンの寺院が多いのもその一つの象徴だし、近鉄電車が生駒への足として走っているのも大きい。まさに、古代以来の神々がいま場所でありながら、近代の都市に抱えられて存在するのが生駒の神々なのである。だからこそ都市が変貌するとともに神々も姿を変えてゆく。それこそが民俗宗教だ。

生駒山地を貫くトンネル工事によって地下水脈が断たれて滝行をしようにも水が出ない、大阪を一望できる眺めのよい土地ゆえに、分譲住宅が神々の山を浸食し、甲子園球場五二・五個分もの霊園が造成されるなど、都市化の波が生駒山地に押し寄せる。今その聖地に流行っているのが、占いとヨガと断食道場だというのもうなずける。さて、四半世紀の後はいかに。